

スゴイ農業、スゴイJA②

JA自己改革の現場から

新規栽培者が加わることでさらに期待される産地に
——JA会津よつば(福島県)南郷トマト生産組合
JA全中広報部

1962(昭和37)年に南会津町南郷地区の14戸で始まったトマト栽培。今では「南郷トマト」として南会津町、只見町、下郷町の3町で生産されるブランドに。高齢化が進んでいる地域ながら、若者が移住し、南郷トマト栽培で生計を立てることで地域活性化にもつながっています。新規栽培者が加わることで、ブランドや産地の維持・発展にもつながり、好循環を生んでいます。



南郷トマトは平成29年で56年目を迎え、栽培農家全員がエコファーマーに認定

生活があって農業がある

「南郷トマト」の栽培地域は、標高400mから700mに分布する山間高冷地で日本でも有数の豪雪地帯だ。その味は、甘みと酸味のバランスが抜群で、特に9月から10月の夏秋トマトの品質の高さに定評がある。昨年の南郷トマト生産組合の販売額は、10億6,000万円と、平成6年以来の10億円の大台を突破した。

JA会津よつば南郷トマト生産組合は平成27年に第44回日本農業賞集団組織の部で大

賞を受賞した。そこで大きく評価された点に、「新規就農者の増加による平均年齢の若さ」がある。南郷トマト生産組合の農家の平均年齢は54歳。全国平均は約66歳なのでひと回り違うイメージだ。

組合では、平成4年ごろからIターンを含めた新規就農希望者の受け入れを積極的に行っている。平成29年度も新規栽培者が5人(1人はIターン)、研修者は4人で、2人はIターン者だ。人材確保の方法にも特色があり、Iターン就農者の多くは近くの会津高原南郷ス



研修者を優れた生産者に育ててきた三瓶さん夫妻。やえさんは、研修生や新規栽培者に「諦めちゃだめ」といつも話す。トマトは長期収穫、途中で多少うまくいなくても挽回できることも多い、という

段階	内容	支援者	資金・制度等
就農相談	関係機関が就農相談を受け、情報共有	生産組合・JA・町・県	
面談	生産組合3役①・JA・町・県から産地概要・順守義務・補助事業等の説明を受ける。就農意欲や就農計画について、面談を受ける。原則として、夫婦または親族との2名以上での栽培とする	生産組合・JA・町・普及所	
研修希望申込書	就農希望者は申込書を提出し、生産組合はこれを受理する	生産組合・JA	
研修受け入れの検討	役員会において、研修受け入れの可否を審議する。受け入れる場合、研修先や利用できる補助事業について検討する	生産組合・JA・普及所	
住居の斡旋・確保	住居の斡旋や交渉を支援する	研修先農家・町	各町④：空き家バンク、新規就農促進住宅等
研修	原則1～2年間。農業経営全般と地域社会について研修先農家から学ぶ。この間に圃場の選定も行う	研修先農家・指導班②・町・農林事務所	国：青年等就農給付金(準備型) 各町：研修支援事業等 JA：地域振興積立金
圃場準備	栽培予定圃場に、排水路・パイプハウス・灌水設備等の設置を行う	研修先農家・研究部③	県：チャレンジふくしま水田フル活用緊急対策事業等 生産組合：重機等の貸し出し 研究部：設置支援(国：事業規模に合わせて併用する場合もある)
就農	農業経営を開始。就農1年目は週2回、2年目は週1回の指導班による巡回指導を受ける	研修先農家・JA・指導班・町	国：青年等就農給付金(経営開始型) 各町：初期経費助成事業等 JA：担い手支援事業、新規就農応援事業等 生産組合：重機の貸し出し

①生産組合3役：南郷トマト生産組合組合長1名、副組合長2名の計3名。

②指導班：南郷トマト生産組合3役、研究部長、JA会津よつば南郷営農課、農業振興普及部により構成され、指導の中心となって巡回や技術情報誌の発行を行っている。

③研究部：南郷トマトの若手生産者及び新規栽培者で構成され、新規資材試験や技術研さんを行っている。

④町：南郷トマトの栽培地域は、下郷町・只見町・南会津町の3町。

キー場に来ていた若者だ。

JA会津よつば南郷トマト生産組合組合長の三瓶清志さん(52)は、「彼らは農業をやりたくて来ているわけじゃなく、スノーボードやスキーをやりたくて来ています。冬は長期間滞在していますが、ここに農業という仕事があることも知らない。だけど、農業を始めると農業が面白くなるんです」と語る。

南郷トマト生産組合における就農支援体制は上表のとおりだ。生産組合、JA、行政が連携して、営農面だけでなく、資金面や住環境面でもしっかりと新規就農者を支える仕組みをつくっている。

生産組合が就農希望者に求める条件は、まず2つある。第1の条件とは、

①労力確保のため夫妻もしくは親族を伴って定住すること

JAの南郷営農経済センター一次長兼営農課長の八須賀文廣さんによると、「就農希望の電話の問い合わせも結構あります。まずは『1人ですか?』と聞きます。1人の場合は、この条件を伝えて断っています」という。その理由は、いろいろな希望者を受け入れてきて「どんなにやる気があっても、1人では難しい」という経験則なのだという。

トマト栽培は、力仕事が比較的少ないが、誘引や整枝など手間のかかる作業が多い。農

作業でも、女性の仕事が多く、まさに“女子力”で成り立っているのだ。

三瓶やえさん(50)は、「(新規栽培者の)お嫁さんもほとんどが農業以外の仕事をしてから来ます。それがすごくいい。いろんな見方、経験もいろいろ、そうしたことを生かしてほしい」と新規就農の女性たちに期待している。

もう1つの条件が、

②ベテラン農家のもとでおおむね2年間研修を受けること

研修が、研修者や新規栽培者とベテランの研修先農家との結びつきを強くし、家を借りるときにも研修先農家が大家さんと掛け合ってくれるなど住環境面のフォローにつながる。三瓶組合長は、「農業面だけでなく生活面が大事だ」という。研修も農業技術を学ぶだけではなく、地域といかに溶け込めるかが課題。地域の集まりに積極的に顔を出し、地域の人と信頼関係をつくるには2年間、少なくとも1年間は必要になってくる。

有利販売と新規栽培者が加わる好循環

新規栽培者にとっての「南郷トマト」の魅力は、「売る心配をせずに、トマトを作ること」に集中できることが大きい。やはりなんといっても、共選共販の強みを生かしてブランド力で有利販売できるから経営を軌道に乗せ



①受粉に活躍するマルハナバチの働きを確認。受粉の出来は収量に大きく関わってくる。宗像さんと酒井さんは、師弟関係でもあり、よき相談相手でもある ②宗像さん夫妻。子どもたちも大きくなり、今は農業に興味を持っていて、雑草とりなどのお手伝いをしてくれるのがうれしい ③「昨年反収17tをとった若い部会員がいます。これまでは反収15tあたりが限界だと思っていましたが、もしかしたら自分たちが思いつきもしなかったようなやり方でまだまだ収量アップできるかもしれないと思うようになりました」と酒井喜憲さん ④JAの南郷営農経済センターの八須賀次長。高品質な南郷トマトは、豪雪地帯ならではの600tの雪を利用して予冷出荷する ⑤選果施設で、人の目だけでなく、センサーで糖度などを測定し、色み、大きさ、等級などがそろった品質のものを箱詰めする

ることができる。

一方、新規栽培者が加わることで、若手の生産者が増えて産地が活性化した。高齢などでやめる部会員が出て、その圃場^{ほじょう}を引き継ぐようなかたちで産地が維持できる。

南郷トマト生産組合も営農技術向上には力を入れている。若手生産者や新規栽培者で構成され、技術研さんをする研究部もある。営農指導員も新規栽培者の圃場は特に小まめに回るほか、部会員の圃場では研修会も開催される。新規栽培者のハウスは研究部や農家の力を合わせて、1日で完成する。協力してくれた農家には、お礼にビールで乾杯しジンギスカンを食べてもらう。これが組合の力だ。

酒井喜憲さん（71）は昭和37年からトマト栽培を始め、多くの研修者を受け入れてきた生産者のひとりだ。

「新規栽培の人は真面目に教わった技術どおりにやると、たいてい本人も驚くほどよい反収でとれるものです。ところが就農して数年す

ると思ったほどとれなくなる、無意識のうちに手抜き、合理化してしまうもの。そこでどこがうまくいかない原因だったかを考え、見極められる人が、またとれるようになります」

こうした段階まで来たのが宗像堅固さん（39）・美由紀さん（40）夫妻だ。スキー好きの堅固さんが、これまでの仕事を辞め、農業がやりたいと移住し、酒井さんのもとで研修をしてから9年目になる。宗像堅固さんは、中でも7月初めの出荷一番乗りと10月初めまでの出荷を目指している。

美由紀さんは、子育て面の重要性を話す。「この地域では1歳から保育園もありますし、待機児童もいないので子育て面でも恵まれています。学童保育もあります」と、農業面の支援だけでなく、育児など行政の支援策も欠かせない。

若い生産者や子どもたちも多く、これからの産地を背負ってくれるような人がしっかり育っている。